



# コラボレーションが生み出す可能性

高齢者、障がい者、こども・若者、それぞれの暮らしの視点から話題提供していただき、参加者同士で意見交換を行いました。多分野で活動する人々との出会いを通し、今まで自分の中になかった視点を取り入れる機会となりました。

## 保坂和輝さん

作業療法士・「きつとPlus」代表



「暮らし」は一人ひとり違う。だからこそ相手の価値観を知り、譲れないことを尊重し、「その人らしい暮らし」に寄り添う。

「つながり」を大切に、「役割」を持ち、本人の力を引き出す（自立支援）ことは、高齢者だけでなく、こどもも大人も障がいがあっても、誰にも共通すること。

## 齊藤実さん

地域活動支援センター「オアシスやまなし結」所長

## 服部敏寛さん

サポートセンターハロハロ管理者



障がいがあるから〇〇できないのではなく、〇〇できないことが障がいと考える。ただ、障がいのことを知っておかないと合理的配慮ができないから知っておくことが必要。

自分の知らないことを知っている人がどれだけ自分の周りにいるかで相手に伝える情報も広がる。

福祉は施設の中にあるものではなく、街中のどこでもできる。落としたハンカチを拾ってあげることだって福祉。

20年後の未来には、制度の隙間を地域で支えるのではなく、地域で当たり前にある支え合いからこぼれた部分を制度で補う未来になると良い。



## 小和田尚子さん

NPO法人青少年就労支援ネットワーク静岡 共同代表理事

困っていることが見えると人は動く。困りごとを養分として人とつながる。行政がすべて解決してくれるわけではない。市民の困りごとを行政に奪われたい。困りごとを市民に取り戻す。

若者たちはいずれもっと広い社会の中で役割を担って自立していく。だからこそ居場所は、入り口も大切な出口も大事。



## 私たちが描く理想の山梨市

最終4回目はこれまでの振り返りを行い、グループに分かれて、「この山梨市でどんな地域が実現したらよいと思うか」「世界に誇れる地域とは?」「理想の地域を実現するためにできること、やるべきこと」について意見交換を行いました。

「知ることで、誰かを守る盾になる」  
知り合うことでコラボレーションの可能性が広がるだけでなく、知り、つながることが互いを守り合う強みになると共有しました。



## 対話力を磨く

自由に地域のことを考える場を積み重ねることで、アイデアが生まれ、地域に対してより深い理解をしていくことができる。

行政に批判的な姿勢だった人も、行政側の人と対話して変わった人もいる。ワークショップで「相手の靴を履いて見る」ことで視野がグッと広がります。

## この火種をつないでいくこと

自分たちはファシリテーション。あくまでも皆さんが自分たちで盛り上がって動き出しているものを、動きが悪いときにはちょっと促進して、自分たちでできるときは手を引いてみていく。そのバランスが大切。と企画者の戸澤さんがインタビューの中で語っていました。

ワークショップは火を灯す場となりました。やりたい気持ちに灯った火種を大きな炎にしていけるよう、つながり続ける続きの物語があります。